
革命家・理論家スターリンと大粛清

福井義高

青山学院大学大学院国際マネジメント研究科

令和4年1月18日

「1937年は不可欠だった」（モロトフ）のか

- 大粛清とはどのようなものだったのか
 - 幹部大粛清（Большая чистка）と大テロル（Большой террор）
 - ソ連の政治犯処刑は1937・38年に集中（図表1）
 - 当時のソ連成人男性の1パーセント
- なぜこの時期に大粛清が行われたのか
 - 共産主義革命家・理論家としてスターリンを理解する必要性
 - 独ソ緊張下の1940年11月7日革命記念日昼食会で、自らと異なり、日々の学習を軽視する最高幹部に激怒、ヴォロシロフ国防相泣きだす
 - レーニン69冊、マルクス12冊、トロツキー8冊、カウツキー7冊他390冊の書籍に書き込み

図表1：政治犯処刑者数

年	処刑者数
1930～53計	786,096
1930	20,201
1931	10,651
1932	2,728
1933	2,154
1934	2,056
1935	1,229
1936	1,118
1930～36計	40,137
1937	353,074
1938	328,618
1937・38計	681,692
1939～53計	64,267

出典：Getty et al. (1993), Thurston
(1996)より一部筆者推計

大粛清前の状況

- 1920年代後半に独裁を確立したスターリン書記長
 - 最大のライバル、トロツキーは1929年に国外追放
- 部分的市場経済導入策ネップ(НЭП)廃止、経済五か年計画(1928年～)、農業集団化開始
 - トロツキーに近い左派路線に転換
 - 軍備増強
 - 数百万人の餓死者(1932～33年)
- 1929年の世界大恐慌に苦しむ資本主義諸国に対し、ソ連は恐慌と無縁の経済成長というプロパガンダ
- 社会ファシズム論(~1934年)
 - 主敵は社会民主主義者

1934年以降安定期に入ったソ連

- 人民戦線路線(1935～)
 - デモクラシー陣営の一員であることを強調
- 経済成長、食料供給安定
 - 1913年から1939年まで、1人当たりGDPは 6割上昇したけれども、そのほとんどは1932年から1937年に実現(図表2)
 - ただし、過大評価されており(図表2a)、1人当たりGDPで英米独仏はおろか、日本にも及ばない水準(図表2b)
 - 1938年の米国の1人当たりGDPは大恐慌前に及ばず、恐慌直後の1930年と同水準
 - 満州事変後の日本とヒトラー政権下のドイツは順調に経済成長
- 1936年に「民主的」スターリン憲法導入

図表2：1人当たりGDP

年	指数 (1913 = 100)
1928	96
1929	97
1930	101
1931	102
1932	100
1933	106
1934	118
1935	134
1936	143
1937	155
1938	154
1939	161

出典：Davis et al. (2018)

より筆者推計

図表2a: 昭和13年国勢図会

表 19. 列國の國富及國民所得

	國富			國民所得		
	總額	國民一人當	年次	總額	國民一人當	年次
	百萬円	円		百萬円	円	
日本… {	110 188	1 710	1930	10 636	165	1930
	*123 800	2 025	1924	13 382	224	1925
米國……	880 388	7 052	1932	187 465	1 474	1935
英國……	289 081	6 380	1935	67 011	1 429	1935
佛國……	126 626	3 205	1925	36 749	876	1934
ソ聯邦…	123 734	899	1924	161 150	959	1934
獨逸……	86 700	1 380	1924	80 704	1 207	1935
印度……	71 610	290	1923	24 189	96	1923
カナダ…	93 675	8 770	1933	19 580	2 061	1927
伊國……	53 675	1 317	1928	4 128	98	1933
支那……	39 453	90	1922	…	…	…

内閣統計局編「列國々勢要覽」による。* 1930年と同一調査方法によるもの。

図表2b:戦間期一人当たりGDP(2011年価格)

年	日本	米国	英国	フランス	ソ連	ドイツ	インド	カナダ	イタリア	中国
1927	3,347	11,532	8,472	6,621	2,077	6,282	1,125	7,726	4,454	
1928	3,554	11,451	8,539	7,063	2,184	6,519	1,125	8,244	4,693	
1929	3,665	11,954	8,772	7,508	2,209	6,457	1,160	8,074	4,889	1,003
1930	3,334	10,695	8,673	7,224	2,308	6,333	1,157	7,669	4,631	1,012
1931	3,321	9,931	8,190	6,751	2,330	5,821	1,133	6,382	4,538	1,015
1932	3,529	8,381	8,206	6,311	2,294	5,359	1,130	5,852	4,602	1,039
1933	3,787	8,048	8,411	6,757	2,380	5,668	1,116	5,372	4,514	923
1934	3,756	8,667	8,939	6,682	2,598	6,150	1,111	5,883	4,466	937
1935	3,825	9,681	9,244	6,513	2,971	6,567	1,084	6,298	4,670	1,007
1936	3,986	10,568	9,620	6,765	3,174	7,095	1,111	6,574	4,471	1,065
1937	4,075	11,295	9,911	7,152	3,437	7,468	1,078	7,130	4,879	1,034
1938	4,257	10,526	9,988	7,119	3,427	7,960	1,065	7,246	4,981	1,003

出典：Maddison Project Database 2020

キーロフ暗殺

- 1934年12月、最高幹部キーロフが暗殺される
 - ジノヴィエフやカーメネフらが関与していたとして逮捕拘束
 - スターリンが黒幕で大粛清開始の合図という説
- スターリンは暗殺を利用したものの関与していない
 - 捜査に直接関与し、のちに日本に亡命したリュシコフが否定
- 大粛清が始まったわけでもない
 - 1936年まで政治犯処刑者数激減(図表1)

モスクワ公開裁判

- すでに一切の権力を失っていたライバルを除去
 - 第1回(1936年): ジノヴィエフ、カーメネフ
 - 第2回(1937年): ピャタコフ、ソコリニコフ、ラデック
 - 第3回(1938年): ブハーリン、ルイコフ、ヤゴダ
- 同時に幹部大粛清が始まる
 - 1936年9月にヤゴダに代えて、エジョフがNKVD長官(内務人民委員)に

幹部大粛清の衝撃

- 1936年時点では、ヴォロシロフ、カガノヴィチ、ミコヤン、オルジョニキーゼといったスターリン最側近の人民委員（閣僚）も部下への信頼を公にしていた
- ところが、政権幹部たちが次々に逮捕処刑される
 - 同郷でとりわけスターリンの信任の厚かったオルジョニキーゼが中央委員会総会直前の1937年2月に抗議の自殺
 - 病死とされ、総会を延期して大葬儀
 - 1936年夏時点の経済関連人民委員20名のうち、1939年初頭の段階で残っていたのは、カガノヴィチとミコヤンだけ

スパイを警戒するスターリン

- 1937年3月3日 共産党中央委員会総会基調演説
 - 党幹部が経済建設の成功に目を奪われ、ソ連が資本主義国に包囲されているという基本的状況を忘れていると批判、資本主義国家間でさえ互いに謀略活動を行っているとしたうえで、こう述べる

マルクス主義の観点から、ブルジョア国家が他のブルジョア国家に対する二倍三倍の破壊工作員、スパイ、後方攪乱者、暗殺者をソ連の内部に送り込んでいると考えるほうが真実に近いのではなかろうか。

人事刷新を進めるスターリン

- 1937年3月5日共産党中央委員会総会総括報告
 - スターリン独裁が確立してからキャリアを積み、過去のライバルたちとはつながりのない若い世代を要職につけるには、絶対忠誠の最側近以外、古い幹部を除去する必要があった
- 経済関連部署、なかでも農業関連部署には、最良の人材を送り込まねばならないし、こうした部署には任された仕事を完遂できる能力を持った新たな最良の働き手を配置せねばならない。

見境のない摘発を戒めるスターリン

■ 1937年3月5日共産党中央委員会総会総括報告

日独エージェントのトロツキストの粉碎と根絶という仕事を如何に現実に成し遂げるのか。これは、本当のトロツキストだけではなく、かつてトロツキズムの方向に傾いていたけれども、その後、もうかなり前にトロツキズムと決別したものも打倒し根絶することを意味するのか．．．少なくともこの総会でこうした主張が繰り広げられた。総会決議のこうした解釈は正しいであろうか。否、決して正しくない。こうした問題では、他のすべての問題同様、個々の例に対応し区別した対応が必要だ。

- 幹部大粛清と同時に、民衆に対する大粛清（大テロル）が始まったわけではなかった

大粛清（大テロル）の背景にある基本方針

- トハチェフスキーら赤軍幹部が逮捕された直後の1937年6月2日軍事評議会拡大会議でのスターリン
 - 軍事・政治的陰謀の中枢にるのが、スパイマスター（обершпион）トロツキーを筆頭に、ブハーリン、ヤゴダ、トハチェフスキーら13人で、ドイツのファシスト、とくにドイツ国防軍とつながっているとし、謀略をすぐに摘発できなかったことを批判
 - すべての党員、誠実な非党員、ソ連人民は自ら気づいた問題点を報告する権利があるだけでなく、そうすることが義務である。たとえばそのうち5パーセントが本当であったとしても、かなりのことだ
 - 5人の真犯人を捕まえるために、一網打尽に100人を処罰し、95人の無実の者が犠牲になるのはやむをえないという基本方針
 - トハチェフスキーらは、この演説の直後、6月12日に処刑

トロイカの設置

- 6月28日、政治局は西シベリアにおける追放されたクラークの反乱に極刑で対処するため、「トロイカ」(тройка)設置を決議
 - 内戦や農業集団化強行の際にも用いられた、通常の刑事司法の枠外で大量弾圧を効率的に進めるため、地域のNKVD責任者、共産党第一書記、検察官の三人で構成され、逮捕・処刑の全権を与えられた委員会

大粛清の幕開け

- 7月2日、政治局は「反ソ分子について」と題した決議を行い、直ちに全国の共産党地方機関に伝達
 - すべての反ソ破壊活動の主たる張本人は、農地から追放された旧クラークや犯罪者という認識の下、こうした人物をすべてリストアップし、特に敵対的な者はトロイカを通じて逮捕・処刑
 - それほど活動的でないにしてもやはり敵対的な者は追放
 - さらに地方機関に、トロイカの人選とともに、処刑・追放されるべき人数の報告を要求

NKVD作戦命令00447号発令

- 7月30日、7月2日決議を具体化する「元クラーク、犯罪者、その他反ソ分子の処罰に関する作戦について」と題された秘密命令発令
 - 全国64の地域ごとに、特に悪質な処刑対象の第1分類と、それ以外の強制収容所送りとなる第2分類の人数割り当て
 - 第1分類は既に収容所に収監されている1万人を含め7.6万人、第2分類は19.3万人、あわせて26.9万人
 - トロイカによって進められる作戦の実行開始期日は8月5日、期限は4か月とされた(7月31日政治局決議)
 - 極東地区トロイカの一人が日本に亡命したリュシコフ

改定される上限

- このNKVD秘密作戦は、主対象がかつてのクラークであったことから「クラーク作戦」と呼ばれる
 - 当初設定された人数は、正確には割り当てではなく上限
 - しかし、上限の変更が可能であり、実際には、スターリンへの忠誠の証を立てるべく、「成果」を競う地方機関からの要望で上方改定され、期間も大幅に延長されて、1937年内では終わらず、大粛清は1938年の11月まで続く
- 1937・38年の処刑・収容者数とその内訳(図表3)
 - 当初設定上限の7.6万人の5倍となる38.7万人、収容者数も当初上限19.3万人の2倍で38万人、あわせて76.7万人
 - クラーク作戦の犠牲者は、この2年間の政治犯処刑者総数68.2万人、収容者総数65.3万人のそれぞれ半分強

図表3：作戦別処刑・収容者数

	処刑者数	収容者数	有罪者計
クラーク作戦	386,798	380,599	767,397
うち当初上限	75,950	193,000	268,950
民族作戦	247,157	88,356	335,513
幹部その他	47,737	184,073	231,810
合計	681,692	653,028	1,334,720

出典：Davies et al. (2018), Binner & Junge (2001)

民族作戦

- クラーク作戦は大粛清の中核をなしていたけれども、あくまでも一つの作戦
- クラーク作戦と同時並行で行われた民族作戦
 - 外国政府とのつながりが疑われた国内少数民族を対象とする複数の秘密作戦
 - 処刑者数で見ると、「民族作戦」で24.7万人が処刑されており、全体の4割弱
 - クラーク作戦と異なり、上限は設定されず、有罪者数に占める処刑者の割合が7割を超えている
 - クラーク作戦では処刑者の割合は半分程度、幹部その他の粛清では2割にとどまっている

代表的な民族作戦

- 1937年7月25日NKVD命令00439号に基づくドイツ作戦
- 8月11日命令00485号に基づくポーランド作戦
- 日本と関わりが深いものとして、9月19日命令00593号に基づくハルビン帰還者(Харбинцы)作戦
 - 帝政ロシアが建設しソ連が引き継いでいた、満洲北部を通る東支鉄道が1935年に満州国に売却されたことに伴い帰国した従業員と家族—ほとんどがロシア人—を対象としたもので、3.1万人が日本のスパイとして処刑された

内部の敵根絶を宣言するスターリン

- 1937年11月7日革命20周年記念日式典後のヴォロシロフ国防相主催の昼食会でのスターリン

社会主義国家の統一を破壊し、その一部や民族たちを切り離そうと画策するものはすべて、国家そしてソ連人民の不倶戴天の敵である。そして、我々はすべてのこうした敵を、たとえ古参ボルシェビキであっても、根絶する(уничтожать)。我々は彼らの一族も家族も完全に根絶する。その行動で、その思考で、そうだ思考であっても、社会主義国家の統一への打撃を企てる者を我々は容赦なく根絶する。すべての敵、彼ら自身、その一族の根絶に向けて！

エジョフシチナ

- ロシアでЕжовщина（エジョフ時代）とも呼ばれる大粛清
 - 1937年から1938年にかけて、エジョフは政治局員より下位の政治局員候補でありながら、スターリンに次ぐ権力者
 - ほぼ毎日、多忙なスターリンの執務室を訪れ、過ごした時間は合計855時間弱で、その長さは内政・外政全般を掌る首相（人民委員会議長）のモロトフに次ぐもの
 - 面会時間の長さが示すように、スターリンは大粛清の実際の遂行にも深くかかわり、エジョフに細部にわたる指示
 - 1938年4月、エジョフはNKVD長官（内務人民委員）のまま、水上交通人民委員に任命
 - 全国で各種施設にその名が冠されるなど、スターリンのエジョフへの信頼は揺るぎないもののようみえた

大粛清終結への動き

■ 落日のエジョフ

- NKVD幹部の水上人民委員部への大量異動が始まり、NKVDの人事体制大幅刷新が進む
- 1938年6月12日深夜、自ら粛清される前に先手を打ってNKVD極東地区トップのリュシコフが日本に亡命
 - 上司であるエジョフにとって大きな打撃
- 8月22日にジョージア共産党第一書記のベリヤがNKVD第一次官に任命される
- 10月8日、政治局はエジョフを委員長とする委員会を立ち上げ、新しい方針に向けた決議草案を10日以内に提出するよう命じた
 - エジョフ以外のベリヤを含む4人の委員に、エジョフの味方なし
 - 新方針決議草案は期限を過ぎても未提出で、この間、NKVDの幹部は次々とベリヤの息のかかった人物にすげ替えられる

大粛清の終わり

- 11月17日、ついに政治局は大粛清終結の決議
 - 人民委員会議(議長モロトフ)及び共産党中央委員会(書記長スターリン)決定として、関係各機関に通知
 - NKVDが共産党の指導の下に、多くの人民の敵を粉砕し、外国諜報機関と結託した破壊工作者をソ連から取り除いたことは評価
 - ただし、まだ完全に敵対勢力を除去できたわけではない
 - これまでのNKVDによる行き過ぎを非難し、NKVDと検事局が犯した許しがたい問題点の原因は、内部に人民の敵が入り込んでいたからとする
 - 今後は通常の司法手続きに沿って、法律に従い捜査を行い、トロイカは廃止し、大量逮捕・追放は禁止

最後にエジョフを肅清したスターリン

■ エジョフからベリヤに

- 11月23日、スターリンに辞表を提出するというかたちをとってエジョフが解任される
- 代わって11月25日にNKVD長官に就任したベリヤは、11月17日の政治局決議に基づき、クラーク作戦命令と民族作戦命令を正式に廃止するNKVD命令を11月26日に発令

■ 「行き過ぎ」の責任はエジョフに

- 11月17日の決定から明らかなように、大肅清の責任をすべてNKVDに押し付け、エジョフ解任に続き、NKVD幹部の肅清
- エジョフは水上交通人民委員の職に名目上とどまったものの、全く実権を失い、1939年4月10日に逮捕され、1940年2月4日に処刑

大粛清はNKVDの暴走？

- 大粛清終結を目前に控えた1938年10月10日政治局会合
ブハーリン派の人間は、1万人、1万5千人、2万人あるいはもっといたかもしれない。トロツキー派の人間は同じくらいか、それ以上いただろう。それで、全員がスパイだったのか？決してそんなことはない(Конечно, нет)。
 - 反政府組織・活動を理由とする逮捕者のうち、右派すなわちブハーリン派は3.2万人、トロツキー派は6.1万人
 - エジョフ率いるNKVDの「暴走」は、スターリンの「5パーセントが本当であったとしても、かなりのことだ」という大粛清前の言葉を忠実に実行しただけ
 - 大粛清を遂行した地方機関がスターリンの命令に唯々諾々と従うだけでなく、ある程度の自主性をもって行動したことは確かだとしても、大粛清は最初から最後まで完全なコントロール下に

反ソ謀略活動は完全な捏造だったのか

トロツキーの場合

■ 統一左派反対ブロック

- 生前、一切の関与を否定したけれども、1930年代前半にソ連国内の支持者を通じて、ジノヴィエフやカーメネフをリーダーとする左派グループと接触

■ スターリンに和解申し入れ

- 共産党政治局に宛てた1933年3月15日付秘密書簡で、自らがソ連に帰国し、再度、政権に参加することを申し出る
 - 農業集団化強行による政治的経済的混乱で、このままだとソ連が立ち行かなくなるとして、これまでの対立を乗り越え一致団結が必要だと訴えた
 - 5月10日にもう一度書簡を送ったものの、政治局すなわちスターリンからの返事はなく、この後、トロツキーのスターリン批判は激化

■ エジュノールの告白

- 亡命後、暗殺されるまでトロツキーの秘書・最側近のジャン・ヴァン・エジュノールが晩年、トロツキーによる反スターリン策謀があったことを告白

反ソ謀略活動は完全な捏造だったのか

ブハーリンの場合

- スイス人コミンテルン書記アンベール＝ドローの回顧録
 - 1929年春、スターリンと対立し影響力を失いつつあったブハーリンは政治的立場の異なるジノヴィエフとカーメネフのグループと連携し、スターリンと対抗しようとする
 - アンベール＝ドローは、スターリン打倒は政治的プログラムではないとして、そうした無原則な連携に反対したと述べたあと、こう記している。

ブハーリンは私に、スターリンを取り除くため、彼らはすでに個人的テロを用いること (utiliser la terreur individuelle) 決めているとも語った。

- アンベール＝ドローはスイス帰国後、共産主義運動と決別し、スターリンを擁護している可能性はゼロ

なぜ1937年なのか

- スターリンがなぜ1937年に始めたのか
 - 大粛清に関するもっとも重要な論点のひとつで、いまだ研究者の間でも議論が続いている
- フレヴニュークHSE教授、黒宮博昭インディアナ大教授
 - 迫りくる不可避の—とスターリンが考えた—戦争に備えて、社会の「第五列」を前もって根絶するのがスターリンの目的
- 黒宮教授の言を借りれば
大粛清は戦争準備のための先制攻撃(pre-emptive strike)であった
- 戦争に備え物理的抹殺の必要性
 - クラーク作戦の後方攪乱強調、収容者3万人も処刑
- 大粛清の外国のスパイ容疑者数(図表4)
 - 国境を接するポーランドが最大で、日本が次ぎ、ドイツを上回る

図表4：外国スパイ容疑逮捕者数

	1937年	1938年	計	比率
外国スパイ計	93,890	171,149	265,039	100%
ポーランド	45,302	56,663	101,965	38%
日本	18,341	34,565	52,906	20%
ドイツ	11,868	27,432	39,300	15%
ラトビア	7,371	11,490	18,861	7%
その他	11,008	40,999	52,007	20%
逮捕者計	936,750	638,509	1,575,259	—

出典：Лубянка (2004)

大粛清と同時に本格化する戦争準備

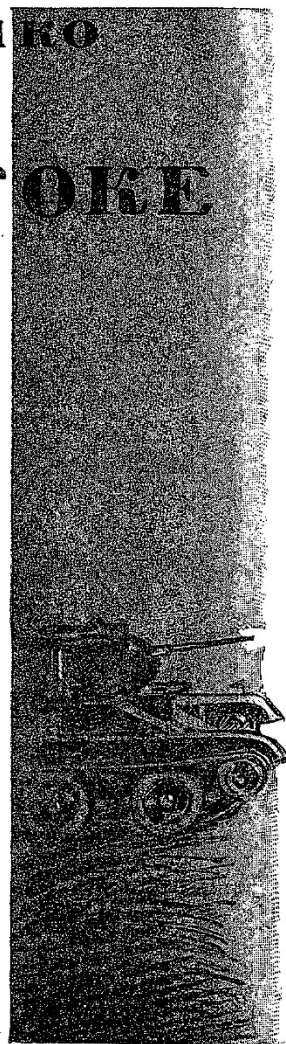
- 1937年11月赤軍増強計画
 - 1938.1.1平時定員160万人
 - 動員時計画650万人(うち極東141万人)
- 1938年3月作戦計画
 - 対欧州及び対極東二正面作戦
- 1938年5月日本空襲予行演習
 - 国民政府軍機として九州でパンフレット投下
 - 朝日新聞1938年5月21日付朝刊「支那？怪飛行機 九州に現はる 反戦ビラを撒き遁走」
 - 1937年、対日戦、東京空襲をテーマにした『極東にて』刊行
 - 著者は『アレクサンドル・ネフスキー』脚本家ピョートル・パヴレンコ

П. ПАВЛЕНКО

НА ВОСТОКЕ

РОМАН

СОВЕТСКИЙ
ПИСАТЕЛЬ
1937



1938年10月1日スターリン非公開演説

攻撃戦争準備

■『共産党小史』プロパガンダ担当者会議

戦争の問題に関するボルシェビキの目的、全く微妙なところ、ニュアンスを説明する必要がある。それは、ボルシェビキは単に平和に恋焦がれ、攻撃されたときだけ武器を取る平和主義者ではないことだ。それは全く正しくない。ボルシェビキ自らが先に攻撃する場合がある。戦争が正義であり、状況が適切であり、条件が好都合であれば、自ら攻撃を開始するのだ。ボルシェビキは攻撃に反対しているわけでは全然ないし、全ての戦争に反対してもいない。今日、我々が防御を盛んに言い立てるのは、それはベールだよベール... 我々の本心を全て洗いざらい打ち明けて、手の内を明かすとしたら、それは愚かなことだ。そんなことをすれば間抜けだといわれる。

1938年10月1日スターリン非公開演説

理論的確信

実は、レーニンは資本主義の跛行的発展状況の下、個々の国での社会主義の勝利が可能である、なぜなら跛行的発展つまり遅れる国がある一方、先に進む国があるのだから、と教えてくれただけではなく、レーニンはまた、ある国は遅れる一方、別の国は先に進み、ある国は努力する一方、別の国はもたもたするので、同時の一撃は不可能だという結論にも達していたのだ...

異なった国の間で社会主義への成熟度合いが異なっており、この事態に直面して、全ての国で同時に社会主義が勝利する可能性があるなどと、どうして言えるのか。全くばかげている。そんなことはかつて也不可能であったし、今日においてもあり得ない。どういうわけか、この観点を隠して、個々の国で社会主義の勝利が可能であることだけに言及することは、レーニンの立場を完全に伝えていない。

「間抜けな日本」を嘲笑するスターリン

■ 1937年11月18日、中国代表団への発言

ソ連は現時点では日本との戦争を始めることはできない。中国が日本の猛攻を首尾よく撃退すれば、ソ連は開戦しないだろう。日本が中国を打ち負かしそうになったら、その時ソ連は戦争に突入する。

■ 1938年2月7日、国民政府立法院長孫科への発言

歴史というのはふざけるのが好きだ。ときには歴史の進行を追い立てる鞭として、間抜け(дурак)を選ぶ。

■ 1939年7月9日、蒋介石への発言(孫科経由)

今まで二年続いた中国との勝てない戦争の結果、日本はバランスを失い、神経が錯乱し、調子が狂って、英国を攻撃し、ソ連を攻撃し、モンゴル人民共和国を攻撃している。この挙動に理由などない。これは日本の弱さを暴露している。こうした行動は他の全ての国を一致して日本に敵対させる。

ヒトラーをけしかけるスターリン

■ 1939年9月7日、コミンテルン書記長ディミトロフへの発言

この戦争は二つの資本主義国家群（植民地、原料などに関して貧しいグループと豊かなグループ）の間に、世界再分割、世界支配をめくり行われている。我々は、両陣営が激しく戦い、お互い弱めあうことに異存はない。ドイツの手で豊かな資本主義国、特に英国の地位がぐらつくのは、悪い話ではない。ヒトラーは、自らは気付かず望みもしないのに、資本主義体制をぶち壊し、掘り崩しているのだ。...

我々は、さらにずたずたに互いに引き裂きあうよう、両者をけしかける策を弄することができる。不可侵条約はある程度ドイツを助けることになる。次の一手は反対陣営をけしかけることだ。

資本主義国の共産主義者は、自国政府と戦争に反対して、断固として立ち上がらねばならない。

マルクス主義からの逸脱？

遅れた農業国での革命

- 第二インターナショナルの「正統」マルクス主義
 - 社会主義革命は工業化が進んでから
 - カウツキー(独社民党)、プレハーノフ(露メンシェビキ)
- マルクス
 - 革命後工業化する可能性を否定していない
 - マルクスの念頭にあったのは遅れた農業国ドイツ
 - 革命家マルクスに忠実なのはレーニン、スターリン
- レーニン
 - 1848年のドイツにおけるマルクスと同様の状況で、革命に成功

共産党宣言(1848年)

- 国(Nation)という単位を是認し、遅れた農業国ドイツでの革命を念頭においた「共産党宣言」

労働者は祖国(Vaterland)を持たない。人はかれから、かれらがもたないものをとりあげることはできない。プロレタリアートは、まず政治的支配を獲得し、国民的階級に上昇し、自己を国民(Nation)として構成しなければならない、という点で、それ自体やはり、まったくブルジョワジーの意味においてではないとはいえ、国民的である。

共産主義者たちは、かれらの主要な注意をドイツにむける。なぜなら、ドイツはブルジョア革命の前夜にあるからであり、そしてそれがこの変革を、十七世紀のイギリスや十八世紀のフランスよりも、進歩したヨーロッパ文明一般の諸条件のもとで、かつ、はるかに発展したプロレタリアートによって、遂行するからであり、こうしてドイツブルジョワ革命は、プロレタリア革命の直接の序曲以外のものではありえないからである。(水田洋訳)

マルクス主義からの逸脱？

一国社会主義建設

- マルクスにとっての共産主義革命
 - 遅れたドイツ国民国家化と近代化の手段としての側面
- カウツキーのアウタルキー社会主義論
 - 工業化した大国は一国社会主義可能
- 一国社会主義はボルシェビキの統一見解
 - レーニンはもちろん、トロツキーも含め、内戦を乗り切った後、ボルシェビキ指導者は一国社会主義建設の可能性を確信
 - スターリンの「独創」ではない
 - トロツキーが否定的になるのは政権を追われた1920年代以降
- マルクス、レーニンの正統な継承者を自負するスターリン
 - 事実その通りで、赤軍を強大化し世界戦争を契機に世界共産化

共産主義革命家スターリン

スターリンはロシア民族主義者 (nationalist) ではなかった。．．．彼はロシアではなく、ソ連社会主義体制と、集団化された農業 (collectivised agriculture) そして重工業と自己を同一化していた。ソ連体制は全くロシアではなかった。

ほぼ確実に、スターリン体制を支えていたのは、指導者 (the leader) にも指導される者にもある程度共有されていた信念 (belief) であった。未来への信念、救済 (salvation) への信念、社会主義の正しさへの信念、そして歴史の法則への信念。この信念がスターリンのテロルを正当化した。この意味で、ソ連というシステムは、スターリンをその神 (God) とする信徒組織 (religious order) といえなくもない。

(H. Kuromiya, *Stalin*, pp.206-207)

大粛清なしに不可能だった大戦勝利

ヒトラーと違って、スターリンは彼と信念を同じくし旧体制の遺産から自由かつ政治的に忠誠で専門的能力のある新しいソ連エリートを作り出した。そのため、第二次大戦中...数々のあつれきがあったものの、スターリンとソ連軍最高司令部は、ヒトラーとドイツ国防軍のヒトラーがその忠誠心を完全には信用できなかった将軍たちに比べて、はるかによく一丸となって取り組んだ。スターリンは古い世代の軍幹部の忠誠心を疑っていた。スターリンは内戦時、彼らと協力して働くことはできなかったし、第二次大戦においても、そうであったろう。

(H. Kuromiya, *Stalin*, pp.206-207)

スターリン：啓蒙主義の一つの帰結

スターリンは西洋の伝統 (Western tradition) と何の関係もなく、彼の死骸はロシアあるいはアジアの押し入れのなかで朽ち果てることがいずれ証明されることを、我々は願っている。しかし、残念ながら、そんな証明は不可能なのだ。

スターリニズムは理性の啓蒙的ユートピア (Enlightenment Utopia of Reason) の終わりではなく、その成就なのである。ソ連の独裁者は人類に大きな貢献をしてくれた。その実例でもって、スターリンは、合理主義がその計り知れない価値にもかかわらず、西洋の伝統が同時に作ってきた別の啓蒙的価値から孤立してはならないことを示した。とりわけ、個人的自由によってバランスを保たれることがなければ、この解放の原理 (liberating doctrine) は狂気となる。

(van Ree, *Political Thought of Joseph Stalin* pp. 286-287)

参照資料・文献

I. V. Stalin Works, vol. 1 [XIV], 1934-1940 (1967, Hoover Institution).

1941 年, *Книга Вторая* (1998, Международный фонд "Демократия").

И. В. Сталин в работе над «Кратким курсом истории ВКП (б)» (2003, *Вопросы Истории* 4:3-25)

Кто руководил НКВД, 1934-1941: Справочник (1999, Звенья).

Лубянка: Сталин и главное управление госбезопасности НКВД 1937-1938 (2004, Международный фонд "Демократия").

The Diary of Georgi Dimitrov, 1933-1949 (2003, Yale UP)

Maddison Project Database, version 2020.

矢野恒太他編 (1938)『日本国勢図会 (昭和13年版)』(国勢社)。

Е. А. Горбунов (2010) *Восточный рубеж: ОКДВА против японской армии* (Вече).

В. В. Марьяна (2000) *Дневник Г. Димитрова*, *Вопросы Истории* 7:32-55.

Л. Наумов (2007) *Сталин и НКВД* (Эксмо).

П. Павленко (1937) *На Востоке* (Советский Писатель).

Ф. И. Чуев (1991) *Сто сорок бесед с Молотовым : из дневника Ф. Чуева* (Тerra).

R. Binner & M. Junge (2001) *Wie die Terror "Gross" Wurde: Massenmord und Lagerhaft nach Befehl 00447*, *Cahiers du Monde Russe* 42: 557-613.

R. W. Davies et al. (2018) *The Industrialisation of Soviet Russia 7: The Soviet Economy and the Approach of War, 1937-1939* (Palgrave).

A. B. Feferman (1993) *Politics, Logic, and Love: The Life of Jean van Heijenoort* (Jones and Bartlett).

J. A. Getty (1986) *Trotsky in Exile: The Founding of the Forth International*, *Soviet Studies* 38: 24-35.

J. A. Getty & O. V. Naumov (1999) *The Road to Terror: Stalin and the Self-Destruction of the Bolsheviks, 1932-1939* (Yale UP).

J. A. Getty et al. (1993) *Victims of the Soviet Penal System in the Pre-war Years: A First Approach on the Basis of Archival Evidence*, *American Historical Review* 98: 1017-1049.

J. Humbert-Droz (1971) *De Lénine à Staline: 1921-1931* (La Baconnière).

O. V. Khlevniuk (1995) *The Objectives of the Great Terror, 1937-38*, in J. Cooper et al. (eds.) *Soviet History, 1917-53* (St. Martin's Press).

O. V. Khlevniuk (2009) *Master of the House: Stalin and His Inner Circle* (Yale UP).

H. Kuromiya (2005) *Accounting for the Great Terror*, *Jahrbücher für Geschichte Osteuropas* 53: 86-101.

H. Kuromiya (2005) *Stalin* (Pearson).

M. E. Lenoe (2010) *The Kirov Murder and Soviet History* (Yale UP).

K. Marx & F. Engels (2005 [1848]) *Manifest der Kommunistischen Partei* (Fischer).[水田洋訳『共産党宣言・共産主義の諸原理』(講談社)]

E. van Ree (2002) *The Political Thought of Joseph Stalin: A Study in Twentieth-Century Revolutionary Patriotism* (Routledge).

E. van Ree (2015) *Boundaries of Utopia: Imagining Communism from Plato to Stalin* (Routledge).